2010年度のサービスラーニングクラスを振り返って

石川　満

2010年度のクラスの学生は、１２名であり、保健福祉学科・社会福祉学科デイ・社会福祉学科アフターの構成クラスであった。

サービスラーニングの活動先ＮＰＯは、チャレンジド（障害者・児の支援、美浜町）３名、エンドゴール（若者のキャリア支援等、半田市）２名、ゆめじろう（障害者・児の支援等、武豊町）３名、りんりん（高齢者・障害者の支援・学童保育、半田市）３名、知多地域成年後見センター（知多市）１名で、１２名全ての学生が無事に１年間の活動を終了した。

これらの活動先ＮＰＯは、担当教員とも比較的面識があるところではあるが、６月までに全ての活動先を担当教員が事前訪問し、学生の自主性や主体性をできるだけ引き出すように配慮してほしいこと、ぜひ率直に学生たちに叱ったり、鍛えてほしいことなどをお願いした。

クラスが始まった当初が、学生たちが比較的おとなしいこと、活動の企画をするということが殆ど経験がなく、戸惑っていることが印象に残っている。それでも夏休みの間から、彼らが企画し、それを実際に行い、それぞれの学生たちはとても貴重な体験をする事ができた。お世話になったすべてのＮＰＯ法人に、心から感謝を申し上げたい。

チャレンジドで活動した諸君は､夏の海辺でのキャンプや､ちゃれっこ祭り等の活動であった。夏休み前から学生たちは主体的に計画の準備や打ち合わせを進め、スタッフの理解も得てのびのびと活動を進めることができた。活動後の研究でも、大学が所在するこの美浜町では障害者の支援するための働く場も、すまいの場も不十分であり、今後関係者が力を合わせて町と協議を進めなければならないことを明らかにした。

エンド・ゴールで活動した諸君も、夏休み前から企画の打ち合わせ等に出向いていたが、彼らが企画してプログラムは法人の都合（学生の都合ではない）で実施できなかった。社会に出ればこのようなこともあると彼らは認識しているが、やはり残念であり、その後の活動のペースもいまひとつといった感じだったようだ｡それでも他大学や本学の学生やスタッフ等との活動を通し、多くのことを体感した。若者のひきこもりについても考察した。

ゆめじろうで活動した諸君も夏休み前から夏祭りの打ち合わせをスタッフや利用者及び利用者の親たちと行い、活動を企画し、実際に活動させていただいた。その中で、計画をすることの重要性､具体的な打ち合わせの必要性などを体感した｡また主に自閉症に方に対する援助方法の「ＴＥＡＣＣＨ」について資料収集し、実際の援助場面で活用することも経験した。また今後ゆめじろうがさらに地域における理解を得ていく必要性を考察した。

りんりんで活動して諸君は、トレーラーハウスを活用した学童保育の活動や、高齢者のデイサービスにおける「沖縄の日」等で活動した。沖縄の日のため、学生たちは沖縄のお菓子づくりや沖縄の踊り（これについては半田市を中心として活動している沖縄民謡サークルの協力も得た）を企画し、実際に準備や事前の体験もした。本学のニュースレターにも写真が掲載されるなど、印象深かったようである。地域密着の小規模な高齢者・障害者サービスの重要性に気づき、半田市内にはまだ少ないことなども調査した。

主に活動先ごとのグループ活動が中心であったが、活動を通して何を学び、どのような力をつけるか、実際に活動後それらがどうであったかなどについて、節目には全員が個人発表をした。

活動を始める前にはいわゆるおとなしい学生たちであったが、活動後は明らかに活動をやり終えた自身がその表情に伺えた。毎年チャレンジドで活動した学生たちは、重度訪問介護の研修を受け、障害者の生活支援をしているが、そのほかでは活動の継続は今後の課題として残されている。今後卒業研究等でも、これらの活動先と連絡を取ってほしいと考える。

これらを通し、主体的に学び続けていく力が本物になることを心から願っている。